

令和三年四月一日

新型コロナウイルス感染防止のため「メール句会」「オンライン句評会」を実施。  
兼題『駅』『桜(一切)』

中村 晃也

木の芽風村営バスのレストラン  
風に舞ふ花びら午後のミルクテイ  
風折れの水仙の咲く道の駅  
青空や白の際立つ花辛夷  
花びらの渦を巻き込む水車かな

宮原 凧

返信は無用とありて春寒し  
朝食に半熟卵ミモザ咲く  
棺には季寄せとワイン春逝かん  
春の駅誰も気づかぬ家出かな  
海見ゆる父母の墓にも桜東風

首藤 しずを

浅間とほく花菜にねむる駅舎かな  
桜さくら頬を火照らす道祖神  
菜の花や崖下千曲の早流れ  
焦点の合はぬ日和や木瓜の花  
一行をまたもなぞりて春深し

森田 元斐

城山に立てば斐伊川花の中  
大楠と過ぎ来し語る午後うらら  
朱と燃えし花弁朱のまま落椿  
駅前の黙の広場や桜舞ふ  
花匂ふ河畔の灯りともる頃

斉藤 まさお

菜の花や上り線待つ無人駅  
見渡せば花花花の見事さよ  
花散るや眼下千鳥ヶ淵深し  
おーい牛返事ひと鳴春うらら  
バイアスのフレアスカート春野風

高橋 由紀子

菜の花や撮り鉄群れる無人駅  
道の駅に草餅売るや異国の娘  
黒幹の根元にぼつと初桜  
春暁や群鳥の舞い万華鏡  
お裾分けの野のからし菜に足軽ろく

大津 そうかい

登山バス待つ駅前の初燕  
(三・一一追悼)  
春怒濤波間のかもめ何祈る  
明日朝の鍋に浅刺の潮吹ける  
救急車過ぎれば空に春の雲  
夕桜今年見かけぬかの媼

長尾 進一郎

送る人迎へる人の駅四月  
村はずれ人を集めし桜かな  
雪形の際立つ山や春深し  
池の浅瀬はおたまじゃくしの運動場  
迷ひなく花ごと落つる椿かな

内藤 まりこ

空に映ゆ辛夷開いた白い花  
うわーっと声の漏れたる桜かな  
駅中のワゴンセールは春の色  
刈り取りの終わった畑に葱坊主  
花吹雪手に受け笑ふ恋人よ

新田 ゆふき

高嶺路や雪に見まごう峰桜  
空広く駅舎を抜ける花の風  
花の影日の陰ごとに連れ立ちて  
恒星の燃え尽くる日か春残照  
海底(うなそこ)の青き魚影や春の雲

土屋 しおん

面影を慕ひ楊貴妃桜めづ  
廃校を見下ろす丘の八重桜  
君といた時帰り来ぬ駅よ春  
バンカーズランプに桜文の萌ゆ  
友誘ふ夕餉のアサリ観念し

志村 良知

咲き溢る桜の中や子らの声

向山は緑それぞれ花の昼

駅からの急坂桜代替はり

きょうはここあすはあつちの桜かな

ぐるり五間騒き(そめき) 静めて花衣

安藤 晃二

天下晴れ桜人満つ歩道橋

花の雲黄一色の野畑かな

サリー行くエスニックなる桜狩り

戻り来し旧駅舎前花吹雪

乙女らの袴颯爽春陽さす

次回は、令和三年五月六日(木)です。

兼題は、中村晃也さん出題の『蝌蚪(かど) (おたまじゃくし)』 並びに知世先生出題の『薄』です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

蝌蚪は春の季語です。おたまじゃくし、蛙の子、蝌蚪の紐、数珠子(じゅずこ)なども傍題としています。俳句を始める前には聞いたこともない言葉でした。懐かしく思い出します。

調べると中国の上代の漆の汁を使って字を書いた形がオタマジヤクシに似ていることから名づけられ、明治以降の俳人たちが音読利用しているそう。もともとこの漢字ではなく、蛙子、一名、科斗。蛙の子なり。と出典があるそう。  
歳時記を見ても圧倒的に男性の句が多い。ここは女性が増えてきたペン俳句としては頑張りがあります。

天日のうつりて暗し蝌蚪の水

高浜虚子

蝌蚪の水わたれば仏居給へり

水原秋櫻子

川底に蝌蚪の大国ありにけり

村上鬼城

蝌蚪泳ぐ傍らの蝌蚪動かして

鈴木鷹男

蝌蚪の上キューンキューンと戦闘機

西東三鬼

蝌蚪沈みゆけり頭を真逆さま

大橋敦子

紐を出て紐に縋れる蛙の子

木場瑞子

コロナウイルス感染症下、時間が経つのが早いような、遅いような日々が過ぎていきます。今年も五月五日が立夏です。「俳句は先取りも佳し」とも言われます。夏の句にも挑戦してください。お互い無事に元気に夏を迎えられることは嬉しいことです。